

教育研究活動

2E (twice-exceptional) 教育・キャリア支援

—「通信制」だからできる学びとは—

三 森 睦 子

キーワード：通信制高校・大学、2E 教育、MI (多重知能)、キャリア教育

はじめに

筆者が開設よりかかわってきた NPO 星槎教育研究所では、幼児から小中高までの不登校・発達障害の子どもたちやひきこもり経験のある若者たちに対し、さまざまな学びの場や居場所を創造し運営してきた。

その活動内容は、不登校生徒のためのフリースクール、ソーシャルスキルやライフスキルなどのスキル学習、認知特性に応じた学習支援、成人ひきこもり支援 (家庭訪問・居場所づくり・家族支援・プレワーク講座)、行政からの委託 (生活保護世帯の不登校・ひきこもり支援、SST の出前授業・被災地小中学校カウンセラー派遣)、発達特性への理解を持った支援員の養成講座、認知特性に合わせた教材や SST 教材の作成などである。

これらの活動は、対象年齢層から地域、内容まで多岐にわたっているが、「生きづらさ」を持つ人たちへの関わりという共通項でつながっている。例えば、家庭内の DV や虐待問題、就労支援機関に相談に来る若年無業者、また不登校・ひきこもりの児童・青少年の学習困難、対人不安、低い自己肯定感、コミュニケーションの苦手さ、メンタルヘルスの問題など、いずれもたどっていくと、顕在化していない気づかれにくい発達障害やその周辺の生きづらさに出会うことが多い。

最近では、発達の特性や LD・ADHD・ASD などの発達障害に対する理解や配慮も増え、早期発見、早期療育、合理的配慮のある教育を受け、自己理解を経て就職するという流れもできてきた。しかし、一方では発達障害に気づかずその流れに乗っていない人々の方が圧倒的に多く、非正規労働、社会的ひきこもり、生活保護などを余儀なくされている現実がある。これは当人にとっても日本の社会にとっても大きな損失である。

本稿では、そういった顕在化しにくい発達障害またはその周辺の生きづらさを持つ生徒たちに対し、「通信制」という弾力的なシステムを活用し、才能を活かしたキャリア形成を図る星槎国際高等学校の教育についてまとめて紹介する。さらには、星槎大学も加わった、これからの新しいプロジェクト学習やキャリア教育についても考察していきたい。

1. 多様な学びの場の設立

1-1) 星槎の教育機関

星槎グループには、教育システムが異なる3種類の中等教育の教育施設があり、それぞれ独自のアセスメント・IEP（個別教育計画）・教育プログラムがある。ライフステージを通じた「境目のない支援」が重要な理念として掲げられているが、その隙間からこぼれてしまう生徒たちを一人でも減らせるように、「社会に必要なが、まだない教育機関」を作り続けてこのように増えていったのである。（図1参照）

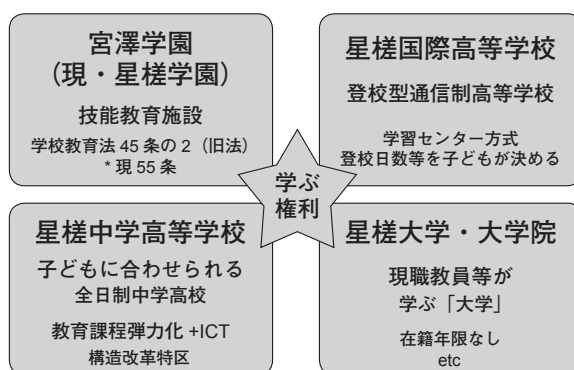


図1 星槎グループの多様な学び舎と設立の経緯

出典：井上一，(2019)「星槎学資料」

以下に例を挙げる。

a) 技能連携校…星槎学園4校

1984年（昭和59年）設立。技能教育施設（学校教育法第55条）であり、座学だけではなく実学を生かした多様な学びが単位となる教育課程。週5日登校。通信制高校である星槎国際高等学校とダブルスクールで学び、専門的な技能を身につけることができる。

b) 全日制・普通科…星槎中学・高等学校

2006年（平成18年）、内閣府より教育特区の認定を受け、学習指導要領の基準に拠らない柔軟な教育カリキュラムが認められた中高一貫の全日制、普通科高等学校。

c) 広域通信制・普通科・単位制…星槎国際高等学校（専攻科併設）

1999年（平成11年）開校。北海道から沖縄まで全国に学習センター・キャンパスがあり、各地のリソースや特色や通信制高校ならではの柔軟なカリキュラムを実施。登校日も授業も自分で選択する方式。

いずれの学校にも共通しているのは、「学校は一つの小さな共生社会」であるという考え方である。「人を認める」「人を排除しない」「仲間を作る」という三つの約束のもと、教員や仲間と学び合い、助け合う共感理解教育の場を創りだすことを基本としている。

本稿では、通信制の星槎国際高校を取り上げ、そのカリキュラムの柔軟性が、既存の学校

に合わなかった生徒たちの能力や可能性を引き出していることを述べていく。

その前に星槎以外の通信制高校の現在の状況とその背景を述べておく。

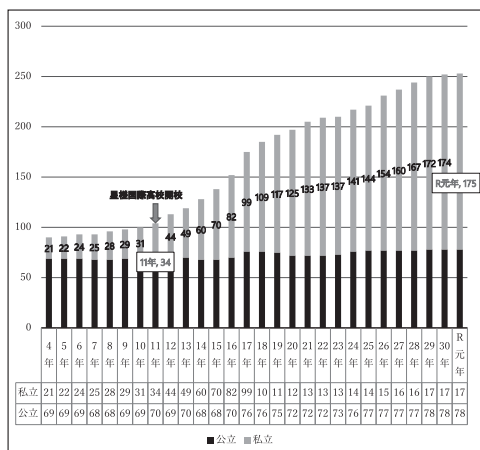
通信制高校は、戦後まもなく¹⁾、高校に通えない勤労青少年・農家の子女等に対して、「教育の機会均等」を掲げ、通信の方法により高校教育を受ける機会を与えるために設立された。しかし、近年では小中学校で不登校、全日制高校不適応などの理由で、さまざまな人が通信制高校に入学・転編入学し、そのメリットを活かして学んでいる。

1-2) 通信制高校数・私立校生徒数の増加と公立校生徒数減少

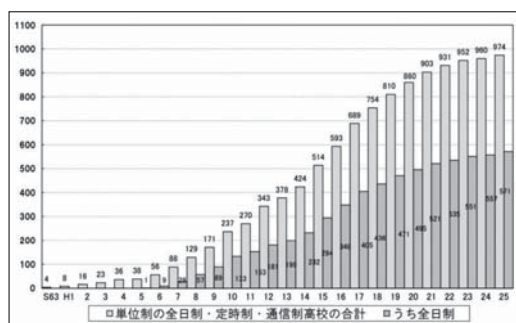
通信制高校では、次の3つの条件を満たせば高卒資格を取得することができる。

- ① 3年以上の在籍、② 74単位以上を取得、③ 特別活動に30時間以上参加。

この自由度の高い通信制の仕組みを活かして《新しい多様な学びの場》が次々と生まれている。以前は「通信制しか行けない」というマイナスのイメージがあったが、今はその自由度の高い学びが先端を行き、アーティスト・芸能人・トップアスリート・プロ棋士・ゲームクリエイターなどが才能を伸ばしつつ高校生活を送るモデルとなり新たなニーズに対応している。そのような「自分の生き方を追求し、新しい価値を創造しようとする」高校生の増加もあり、通信制で学ぶ生徒数と私立通信制高校校数は、少子化時代にあっても増加し続けている。星槎国際高等学校が芦別を本校として開校した1999年には101校だったが、20年経った2019年には252校まで増加している。(グラフ1参照)



グラフ1 通信制高校数の推移(公立・私立)



グラフ2 単位制高校数の推移

グラフ1 出典：文部科学省、「定時制課程・通信制課程高等学校の現状1-4 学校数・生徒数」(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryu/_icsFiles/afieldfile/2013/07/12/1336336_2.pdf) および一般財団法人日本私学教育研究所、「学校数の推移」(http://www.shigaku.or.jp/news/school.pdf) をもとに筆者作成。

グラフ2 出典：文部科学省データをもとにした内閣府会議資料、(https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/reform/wg4/280826/shiryu2-3.pdf)。

1-3) 私立通信制高校数増加の背景

私立通信制高校が増加の一途をたどっているのは、生徒側と学校側両方に理由がある。

- 生徒が私立通信制高校を選び始めたのは以下の理由がある。
 - ① 不登校や高校中退となっている要因（3-1参照）に対応できる教育システムである。
 - ② 高校中退者への学びのセーフティネット²⁾となっている。
 - ③ スクーリング以外の時間を有効活用できることにより、多様な学びが実現する。
- 高校側の理由としては、少子化・生徒数減少への対応策として、学校法人や学習塾が需要のある通信制高校を設立したことによる。2003年「構造改革特別区域法」の施行により、株式会社立の学校が制度として認められたことも拍車をかけた。
- 公立通信制高校・定時制高校生徒数が減少している。

公立通信制高校は、学校数にあまり変化がないが、生徒数は2000年以降減少し続けている。同じ通信制の制度であるが、留年率や退学率が高い。
- 単位制高校が増加している。

また、単位制高校の増加も特筆すべきである。平成になってから、単位制高等学校が一気に増えている（グラフ2参照）。学年制との違いは、単位が足りなくても留年（原級留置）にならないことが大きい。

2. 才能（凸）を伸ばし、困難（凹）をサポートする2E（twice-exceptional）教育

2-1) 「生きづらさ」をもつ子どもたちの才能をどう発見し育てるか

星様ではさまざまな才能のキラメキを見せてくれる生徒たちに出会ってきた。特定分野における専門的な知識や研究（宇宙、鉱石、ロボット、気象、電車・バス・飛行機などの乗り物、世界の国々、戦国武将など）、DTM作曲、独学で楽器演奏、ゲーム制作、美しく精緻なイラスト描画など、展開図を書かずにイメージした立体作成、生き物（虫・動物・植物）の生態に詳しいなど。

しかし、彼らの多くは不登校だった。興味のあることには時間を忘れて集中し、専門家のように博学であるが、興味のないことはなかなかやろうとしない傾向もある。すばらしい才能がありながら、学校では気づかれていないことも多い。むしろ学校では「書字が苦手」「勉強が嫌い」「好きなことしかしない」「わがまま・自分勝手」「トラブルメーカー」「マイルール・マイペース」などと評価されているかもしれない。こんなに魅力的な子たちが、二次的的症状を起こし、不登校になってしまうのは残念でならない。

2-2) 2E教育の考え方

前述のように、豊かな才能がありながら、不適応になっていくのはなぜだろうか。発達特性のある子どもたちの場合、学習面での困難、コミュニケーションの苦しさ、感覚の過敏性、心身の脆弱性や易疲労性などが、集団性・画一性の強い学校で不適応を起こす原因となっている。

このように才能と困難の両面を併せ持つ児童生徒には、2E教育が研究・提唱されている。すなわち、「才能（凸）を伸ばす支援」と「苦手なところ（凹）をサポートする支援」という、凸凹両面への2重の特別支援教育である。以後、凸は才能・興味関心などを、凹は発達の特性の困り・苦手面を表すこととする。

松村ら（2015）によれば、2E教育は大きく二つの理念および方法に分けられる。

- ① 狭義の2E教育…並外れた才能を併せもつ一部の発達障害生徒について、知能や学力、創造性等の才能を、才能教育で用いられる方法で識別して、障害と才能両方に対応する特別プログラムを提供する。
- ② 広義の2E教育…すべての発達障害（傾向・未診断も含む）生徒の（才能を識別しないで）得意・興味（才能）を伸ばし、活かして苦手（障害）を補う理念の下に、学習内容・方法を個性化しながら学習・社会情緒的支援を行う。

つまり、①は天才（ギフテッド）を持つ発達障害生徒への2E教育であり、②はすべての生徒の得意分野や興味関心を伸ばす2E教育である。

現在の日本の教育では、得意なところは「既にできているから大丈夫。できないところをできるように！」と、才能・得意を伸ばすよりも困難・苦手を努力して克服させようとする傾向が強い。しかし、脳機能の偏りによる特性は努力で解決できるものではなく、努力はムダではないが、「努力してもできない」「多大な努力なしにできない」自分に対して自己肯定感を下げたり、悔しさや無力感を積もらせたりする結果になりがちである。そういう苦手分野については、「ツールなどで代替・補完する」「スキルを身に付ける」「人にサポートしてもらう」などのバイパス手段を身につけ、自分固有の才能を開花することに力を入れてあげたい。

では、彼らの持つ才能をどうやって活かし、将来につなげていけばいいのだろうか。「ギフテッド」というに限られた少数の天才にしかあてはまらない言葉のようだが、誰にでも天賦の才はあるはずである。それを発見して伸ばして活かすのが教育者の大切な役割だろう。職業につなげられるのは理想的だが、そうでなくても興味あることにチャレンジし、仲間と協力し合い、何かを達成していく過程で、社会的なスキルを身に付け、貴重な学習や体験をして成長していくことが重要である。

誰にでも才能はあるという話をすると、保護者や教師から「才能がある子ばかりではない」と反論されることがある。才能を狭義の「天賦の才能＝ギフテッド」ととらえていることもあるが、それだけでなく、広義の「得意なところ」でさえ見つけられていないこともある。得意な面がないと思ってしまう背景には「机上の学習ばかりしてきた」「やらねばならないことを優先して、やりたいことは我慢してきた」「できないことばかりに注目して、できていることは当たり前と思って見過ごしてきた」「個人内比較でなく、人と比較してきた」ことによると筆者は考えている。生徒自身も同様に自分への信頼や誇りを失いかけている。生来のネガティブな認知、重なる失敗体験、周りの評価、叱責などで低くなった自己評価を高めていくことが重要である。

2-3) 海外における 2E 教育の実践

諸外国の学校での才能教育では、多彩な才能を見つけて伸ばすために、多様な指導・学習方法が用いられ、教育措置が講じられる（松村，2003）。しかし、日本ではまだ実施されているケースは少ない。

3. 星槎国際高等学校における 2E (twice-exceptional) 教育

3-1) 星槎国際高校の教育システム

1999年に星槎国際高等学校が開校に至るまでには、数々の難関をクリアしなければならなかった。行政に「前例がない」と認可を断り続けられた中で、あきらめずに提案し続けた、まだどこにもない教育システムであった。今では当たり前になった「登校日数を自分で選べる」「継続的に仲間と学べる学習センター方式」「体験型総合学習を重視した横断的カリキュラム」をもつ単位制の広域通信制高校である。

通信制高校のメリットを生かした柔軟なカリキュラムを編成し、「学校に生徒を合わせる」のではなく、「生徒に学校を合わせる」「生徒の能力を引き出し、苦手を補う」2E教育のプログラムを考案し実現している。なぜそれが可能になるのだろうか。

もともと通信制高等学校の仕組みは、面接指導（スクーリング）・添削指導（レポート）・単位認定試験が3本柱になっていて、基本的には自宅において自学自習で進めることが多い。スクーリング時間の比率は科目によって異なるが、「全日制：通信制の比率は35：1」になる。例えば、数学Ⅰ（4単位）の場合で見ると、全日制の授業時間は、週4時間の授業を年間35週（年間140時間）受けることになるが、通信制のスクーリング時間は年間50分授業×4回になる。その時間を面積比で表すと図2になる。

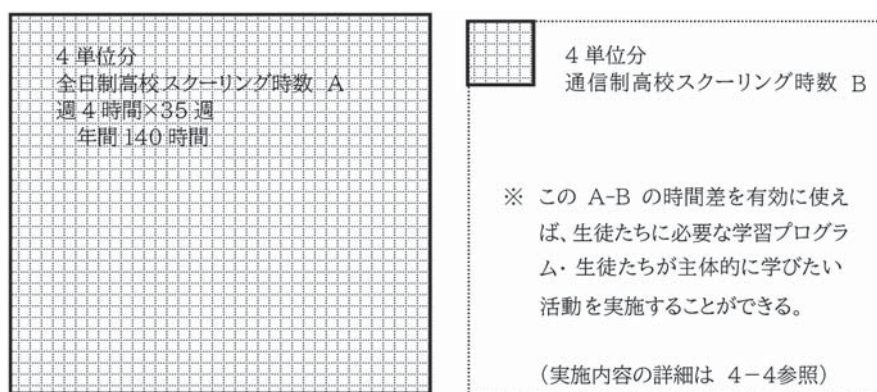


図2 通信制高校と全日制高校の授業時間の差

筆者作成

3-2) 2E の生徒とは

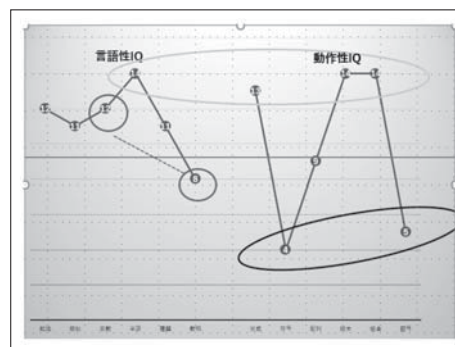
星槎には、豊かな才能がありながら既存の学校では不適応になっていた2Eの生徒が多くいる。その中で本人とご家族の了解を得た1名の例を挙げよう。

Aさん(男)は建築的な立体の創造が得意である。写真1はパソコンソフトのマインクラフト³⁾で創作した作品である。進学校を中退して星槎国際に入学、音楽や技術立体図形など多岐にわたる才能があるが、読み書き困難のためテストで実力を発揮できない。

凸凹が大きく(グラフ3参照)得意な領域と苦手な領域のIQ差は47ある(*15で有意差があるといわれる)。「2E児の才能と障害は互いに隠し合うため、才能にも障害にも気づかれにくい」といわれるように、凸凹の差は激しいが、高い才能が苦手なところを補い平均化され、このような低い領域には気づかれないまま不登校になっていた。



写真1



グラフ3 WISC III

松村(2014)は「認知的個性」は、学習場面で個人のさまざまな得意・苦手や興味などを総合的にとらえる概念であり、生徒一人ひとりの学習特性や個人差を、才能や障害も含めて発達の年齢標準・平均からのズレとして見るのではなく、発達の凸凹のある総合プロフィールとして捉えるものであると述べている。「すなわち、教育など環境の働きかけに応じて、学習の場で物や人との相互作用のなかで、個人差のタイプとして多様に表れたものである」という。

筆者も「凸と凹は表裏一体」「リフレーミングすると凹は凸になる」「凸と凹が一体となって、個人の魅力と個性になる」と考えており、人や体験との出会いによって凸凹のあらわれ方は大きく異なってくる。凹の面だけ取り出して評価しトレーニングする方法は、自信を低下させることが多い。自分の好きなことを仲間とともに活動していく中で、苦手だったことにも自ずと挑戦し、いつの間にか達成・クリアして自信につながっていく例を多く見ている。

3-3) 2E の生徒のアセスメント

一般的に2E教育の対象となる生徒は、学び方が異なるにもかかわらず、典型的な生徒た

ちの集団の画一的な学びに合わせて授業が行われていることが多く、実力を発揮しにくい。

2Eの生徒たちには、「A. 才能には気づかれるが障害には気づかれない」「B. 障害には気づかれるが才能には気づかれない」「C. 障害にも才能にも気づかれない」という3つのタイプグループがある（小倉，2018）。

Aタイプは、2-1)で挙げた子どもたちである。才能には気づかれるが、困難さが理解されないので、配慮されないまま不適応になっていくケースが多い。親や保護者は凸に着目し「もっと努力すれば」と思うが、本人は努力してもできない体験を繰り返している。

Bタイプは、日本の特別支援教育の対象となっている。苦手な克服・トレーニングが目標にされ、才能を伸ばすという視点は持たれにくい。

Cタイプは、3-2)であげたAさんのように、才能が困難を補って平均的に見えてしまう。本人はがんばりすぎるか、できないところを避けるかして何とかこなし、その結果、才能にも困難さにも気づかれないまま放置されていく。

3つのタイプとも自己理解がなく「がんばってもできない」と自己肯定感を下げやすい。

a) フォーマルアセスメントとインフォーマルアセスメント

それでは、生徒たちの才能や能力にどう気づいて伸ばしていけばいいのだろうか。それには、個々の生徒の特性や能力、興味関心、人的環境などの総合プロフィールを理解するアセスメントが必要である。

アセスメントには、標準化され数値で結果が出る「フォーマルアセスメント」と日常生活の場面から特性や能力・スキルなどを把握する「インフォーマルアセスメント」があり、それぞれ長所と短所がある（黒田，2018）。星槎グループ校の中には、入学時に検査結果を必要とする学校もあるが、星槎国際高等学校では、前述のように、自分の才能や困りに気づいていないAタイプやCタイプも多い。筆者の場合、先に日常の行動観察や学業成績や書字、会話内容、面談内容などを把握してから、必要となれば本人と保護者に得意・不得意を客観的なデータとして自己理解することの有用性を話し、了解を得てからフォーマルな検査を実施するようにしている。フォーマルなアセスメントとして、筆者は「ウェクスラー式知能検査（WISC・WAIS）」「VinelandII 適応行動尺度」「TEG（東大式エゴグラム）」などを状況に応じて利用している。「MSPA（発達障害の要支援度評価尺度）」も検討したい。

b) 才能にどう気づくか（才能のアセスメント）

IQについてガードナー（2003）は、知能は単一ではなく、言語的、論理・数学的、音楽的、空間的、身体・運動的、人間関係的、内省的、博物的の8つの知能があると、MI（多重知能）理論を提唱している。生徒の話や日常の言動・授業選択から興味関心を知るとともに、MIがレーダーチャートで表現されるシートを利用して可視化することもある。

c) 包括的アセスメント

「認知的個性」とは、認知・学習スタイルや認知処理様式などを包括した概念であり、環境との相互作用の中で表れた個人差のタイプである。筆者は、フォーマルなアセスメントだけでなく、各種アセスメントツールや関わり合いの中で知りうる下記のような認知的個性にも着目している。

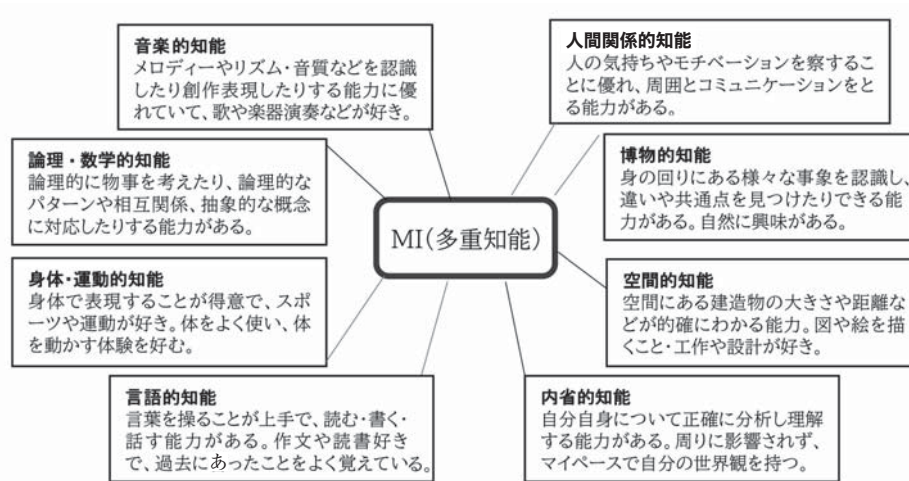


図3 MI (多重知能)

出典：日能研、「8つの知能(MI)で自分の可能性を見つめなおす」(nichinoken.co.jp)ほか

- ① 認知スタイルが、視覚優位タイプ（視覚情報が必要）か、言語優位タイプ（言語での細かい指示が必要）か
- ② 思考スタイルは、論理分析的か、思い付き型か
- ③ 対人関係で相手の気持ちをつかむのがうまいか、相手の気持ちを理解するのが苦手か
- ④ 狭い視野の中で細かく見るタイプか、広い視野でざっと大局をつかむタイプか
- ⑤ 思考や感情を言葉で表出することが得意か、苦手か
- ⑥ 読み書きが得意か、苦手か
- ⑦ 睡眠は取れているか、易疲労性・HSP⁴⁾の体質はあるか、生活は規則正しいか不規則か
- ⑧ 感覚過敏（光・音・味覚・嗅覚・触覚など）があるか
- ⑨ 整理整頓は得意か、苦手か
- ⑩ 注意されたとき、落ち込みやすいか、被害的感情は生まれやすいか
- ⑪ 記憶力はいいか、悪いか（短期記憶か、エピソード記憶か）
- ⑫ 自己評価が高いか、低いか、他者評価とのギャップはあるか
- ⑬ こだわりが強く、変更を好まないか、あまりこだわらないか
- ⑭ 理不尽なことでも「まあ許せる」か、「許せない」か
- ⑮ 不安感が強く緊張しやすいか、そういうことはないか
- ⑯ 感情のコントロールが苦手で切れやすいか、セルフコントロールは得意か
- ⑰ イライラしやすいか、イライラしにくい
- ⑱ 集団が得意か、苦手か

- ⑲ 人前で発表するのが得意か、苦手か
- ⑳ 自分の意見を抑えて相手に合わせるのが得意か、苦手か
- ㉑ 成育歴や家族環境・親子関係はどうだったか

など、発達特性に偏りがある人にありがちな事象について、行動観察や会話の中で、一つひとつ理解していくと、その生徒のプロフィールが浮かんでくる。これらについてたとえ望ましくない一面があっても、よほどでない限り、注意・叱責を与え説教で変えようとするのは少ない。後述するさまざまな体験学習や関わり合いの中で自ら気づいたり友だちからアドバイスされたりして変わっていくからだ。興味のある好きなことを仲間と楽しく体験する中から、「特性」「才能」「多様性」を自己理解し、その力を伸ばしていく。苦手だったことに挑戦しているとき、それができたときに「～に挑戦してるんだね」「…したらできたんだね」と伝えていく。できるようになっていく陰には、「プロンプト⁵⁾」にあたる「お膳立て」を先生や友だちがやっていることも多い。できないと思い込んでいたことも「場」の中で、できた体験を積み重ねて自信を付けていく。自分の気づいていなかった良い点やできるようになったことを、生徒を見つめてきた教師や友人たちがフィードバックして伝えて明確化し、ポジティブな自己理解につなげている。

これらの学習は、取り出したトレーニングではなく、実際の「体験の場」のできごとで、グループダイナミックスともいわれる。創設者の宮澤は星槎国際高等学校が開校したころ、「私は教育者ではなく、場づくり屋だ。その子その子に合った場を作り続ける。仲間といっしょにホンモノを見る、ホンモノを体験する」と、私たちスタッフに何度も語った。教育の場の中で、生徒たちがホンモノ体験できるように。それが次項で述べる教育プログラムである。

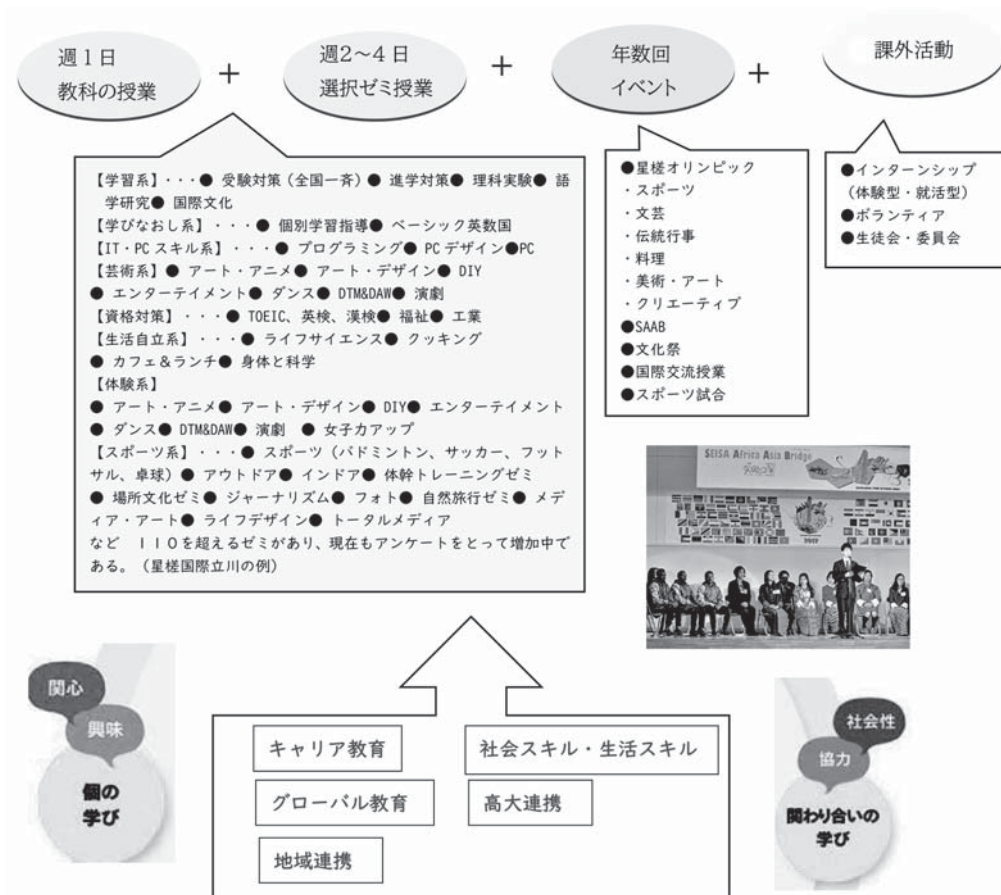
3-4) IEP⁶⁾ (個別教育計画) の役割を果たす「オリジナルな時間割」

2Eの生徒たちの中には、発達特性の偏りもあり、興味関心のあることを細部まで極めたいタイプも多い。「広く、浅く、全般的に」ではなく、「狭く、深く、限定的に」のタイプである。このタイプは、通信制高校のシステムを活用することにより、柔軟なカリキュラムで、興味関心のあることを一気に「トップダウン方式」で体験学習できる。通信制高校はスクーリング時数が少なく、それ以外の時間を活用して一人ひとりのオリジナルプログラムが組めるからである(図4参照 星槎の共感理解教育：アクティブラーニング)。

●選択制少人数クラス

自分の個性、強みと弱み、短期目標・長期目標を考えながら、基本となる教科学習に加えて、SST(ソーシャルスキル)とLST(ライフスキル)、PBL(問題解決型学習)、国際交流授業、インターンシップ、選択ゼミ(9領域・約100種類)などの必要な学習を構造化し、通信制の柔軟なカリキュラムを活かして、IEP(Individualized Education Program)の役割も果たす時間割となる。これらは毎年変更して、新しいゼミや活動にチャレンジすることもできる(これらの学習方式は、料理に例えると、ア・ラ・カルトで一品ずつ選んで自分好みのメニューを組み立てるようなものである)。

生徒の才能・興味・関心を引き出し育てる才能教育の2つの形態として、早修(既存の教



星槎が掲げる「共感理解教育」は、共生社会の実現をめざし、一人ひとりの学力・興味関心を育てていく。「関わり合いの学び」と「個の学び」が構造化されたプログラムで、人とのつながりを学び、相手を認め自分の役割を理解し、社会に巣立っていく力を培っている。

図4 星槎の共感理解教育：アクティブラーニング

筆者作成

育プログラムを早期に履修）と拡充（通常の範囲を超えたより広く深い内容の教育）があるといわれている（岩永, 2016）が、この方式であれば、早修・拡充ともに可能になるのである。

なお、日本では「早修（飛び級）」は認められていないが、高大連携制度を利用すれば、高校に在籍しながら大学の科目を履修することができる。

3-5) 2Eを活かすアクティブラーニング実践例

実際に、星槎国際富山で行われた事例を以下に述べる。

1) 星槎大学との高大連携

ネットワーク会議システムを使った全国一斉授業。大学教員の専門講義の後、各学習セン

ター生徒のプレゼンテーションを行う。

テーマは「地域文化を学び、地域創成を企画」する。

- ① 全国一斉 TV 会議システムを利用して、各学習センターから各地の地域文化や課題テーマについてプレゼンテーションを行う。
- ② 生徒による企画発案…「江戸時代より伝わる富山の薬文化を学び、現代に継承し地域活性につなげたい」(富山)

2) 地域との連携 (写真 2)

「富山の薬文化」「薬膳」を調べ、老舗薬店を見学する。

- ① 行政との連携 富山市環境政策課の協力により、農業体験「えごま」を作る。
- ② 地元企業との連携 商品開発・商品化に向けてのご協力をいただく。
- ③ 商店街との連携 駅や商店街で商品販売をさせていただく。

越中大手市場での出店 (人との出会いと交流・子どもと遊ぶ機会・販売体験)

3) 情報発信

- ① 体験を新聞・ラジオ・雑誌などで発信する。
- ② 学会で、大学教員といっしょに発表する。

このような一連の体験を実施する中で、凸 (企画力がある・一人で地道にコツコツやり遂げる) 凹 (人との関わり・人前で話す・子どもが苦手・不安が強い) という生徒が、自分の企画を伝えるために人前で話し、多くの地元の方々や学童の子どもたちとの関わりの中でプロジェクトを遂行し、それを学会やマスコミで発表するに至った (星槎国際富山、近藤・飯田・高野, 2017)。

この授業の一連の流れの中に「地域文化・地域創生」「地域連携」「高大連携」「キャリア教育」「起業体験」「社会スキル・生活スキルの育成」「情報発信」「関わり合い教育」など、種々の要素が盛り込まれていることがわかる。また、2E 生徒の苦手なところを取り出してトレーニングしなくても、社会参加しつつ自分のやりたいことを実現していく学びの過程で、周囲の応援を得て自ら変わっていったことに気づく。

MI (多重知能) の得意なところを、星槎のアクティブラーニング (共感理解教育) の中で、凸凹を分けずにいっしょに認知的個性として育てていくのである。集団の持つ力 (グループダイナミクス)・場の教育力が有効に働き、チームで社会活動を遂行する中で、社会性・協



写真 2 地域との連携の事例 (左から農業体験、えごまジェラート、富山駅での販売)

調性・自主性・企画力・実行力を向上させている。

最後に：今後の2E教育の課題

本稿では、画一的な学びの中では実力を発揮しにくい、才能と困難の両面を併せ持つ生徒に対して、通信制教育の柔軟なカリキュラムの中で「才能（凸）を伸ばす」ことと「苦手（凹）も凸に逆転する」2E教育について、星槎国際高等学校の取り組みを述べてきた。

星槎国際高校のキャッチフレーズの一つに偏差値と対比して「変化値が高い」というのがあるが、今後は生徒の何がどう変わったのか、それは何によるのかを実証していきたい。また、今回述べたのは広義の2E教育であったが、狭義の天賦の才を活かす2E教育も、星槎大学や星槎道都大学、地域の実践家と連携して進めていけるキャリアプログラムを実践的に進めていきたい。

現在、文部科学省において、「高校教育の質の確保・向上に関する課題・基本的な考え方～高校教育としての共通性を確保するとともに、多様な学習ニーズへのきめ細やかな対応が必要～」として、多様な学習ニーズへのきめ細やかな対応〈多様化への対応〉が検討されている。

そこには下記の課題が挙げられている。

○各学科・課程等における対応

- ・普通科（進路意識の向上や、キャリア・職業教育など学校から社会への円滑な移行推進）
- ・専門学科（社会のニーズに応じた実践的な職業教育推進、高等教育との接続・連携）
- ・総合学科（中学校教職員・保護者の認知度向上）
- ・定時制・通信制課程（学び直しや教育相談、進路指導等の充実、学校外機関との連携促進）
- ・特別支援教育（各地域・学校の実態・ニーズに即した種々の実践・検討の推進）
- ・学び直しの推進（義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための学習機会の提供）

○経済社会の変化等への対応

- ・キャリア教育・職業教育の一層の推進（職業観・勤労観を確立するための取り組み推進）
- ・優れた才能や個性を伸ばす学習機会の提供（ハイレベルな学習機会や切磋琢磨する場の提供）
- ・グローバル人材の育成（豊かな語学力・コミュニケーション能力等を身に付けた人材の育成）
- ・ICT教育の推進（質の高い学びを実現するための効果的な授業の在り方の検討）

星槎国際高等学校のインクルーシブな2E教育は、学習者も学習プログラムも学習スタイルも上記を包括するものであり、さらなる充実を目指すものである。

これから生徒たちが生きる社会は、仮想空間と現実空間が融合した「Society5.0」⁷⁾の社会といわれている。一人ひとりのニーズに合わせて課題解決できる社会である。そこでの基礎学力とはいったい何だろうか。何を身に付けていけばいいのだろうか。明らかに「読み・書き・そろばん」ではないだろう。凹を平らに均す教育でもないだろう。学びの方法も場所も

ツールもすべて多様化していく時代、一人ひとりが人と関わりともに生きていく社会の中で、自分の価値に気づく力、幸せや喜びを感じる力、新たに創造していく力をさらに高める、これからの時代の2E教育を進めていきたい。

補 注

- 1) 戦後まもなく…1948年（昭和23年）学校教育法が施行され、通信教育は当初、国語の1教科のみで実施された。1955年（昭和30年）「高等学校通信教育の実施科目の拡充ならびに同通信教育による卒業について」という文部事務次官通達により、通信教育のみによる高等学校卒業が可能となった。
- 2) セーフティネット…サーカスの綱渡りなどで落下したときの安全確保のために張られた綱のことで、通信制高校が後期中等教育の最後のセーフティネットといわれている。と同時に広義に「社会から離脱しないためのセーフティネット」の意で使うこともある。
- 3) マインクラフト…「マイクラ」と呼ばれるサンドゲーム（ゲーム内にタスクがなく、プレイヤーが自分で目標設定して進めるもの）で、自由にブロックを配置し建築等を楽しむことができる。教材にも使われることがある。
- 4) HSP…Highly Sensitive Personの略で、「とても繊細な人」という意味。1990年代初めアロン博士によって付けられた。感覚も過敏であり感受性が強く傷つきやすく、不登校の生徒に多い。気質であり病名や診断名ではない。
- 5) プロンプト…望ましい行動を引き出すためにあたえる補助的な刺激のこと。これによって成功体験を得て、望ましい行動が強化される。
- 6) IEP…特性のある児童生徒の個々のニーズを満たすために特別に考案された指導計画。
- 7) Society5.0…AIやIoT、ロボット、ビッグデータなどの技術を社会生活に取り入れて、一人ひとりのニーズに合わせる形で社会的課題を解決する新たな社会のこと。狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続き、第5期科学技術基本計画において我が国がめざすべき未来社会の姿として提唱された。

引用文献

- 井上 一. (2019). 「星槎学」資料.
- 岩永雅也. (2016). 「才能教育の現状と課題～教育再生実行会議有識者勉強会（2）資料」, <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaizei/dai34/sankou2.pdf> (2019年12月20日閲覧).
- 松村暢隆編. (2014). 「認知的個性を活かす特別支援の基礎・実践的研究－2E教育の理念で生徒の得意・興味を活かして苦手を補う」(2011-13年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書 2-10).
- 三森睦子. (2014). 「特集・就労支援 教育の立場から 全日制高校・技能連携校・通信制高校～アセスメント・IEP・実習をどう生かすか」, LD研究. 23（4）, p.427.
- 三森睦子. (2014). 「発達障害のある人の就労支援～教育の立場から考える就労支援」金子

- 書房, pp.21-27.
- 三森睦子. (2015). 『『生きづらさ』の背景にあるもの—理解されにくい特性をどうサポートする—』, 星槎大学紀要『共生研究』, No.11, pp.48-54.
- 文部科学省初等中等教育局 (高等学校担当). (2019). 「高等学校教育の現状について」, p.71, https://www.mext.go.jp/content/1421593_6.pdf (2020.1.20 閲覧).
- 高野 愛. (2017). 「個人内ギフトドを発見して活かす選択ゼミ学習・地域と連携する実社会参加」, 日本 LD 学会自主シンポジウム資料.

参考文献

- Howard Gardner 著・黒上晴夫監訳. (2003). 『多元的な知能の世界～MI理論の活用と可能性』, 日本文教出版.
- 石渡圭子. (2017). 「未来の教育が目指すもの—Multiple Intelligences Theory (MI 理論) に基づく教育の普及」, <http://www.futureedu.tokyo/education-news-blog/2017/1/2/multiple-intelligence-and-future-of-education> (2019.11.23 閲覧).
- 松村暢隆. (2003). 『アメリカの才能教育～多様なニーズにこたえる特別支援』, 東信堂.
- 松村暢隆・佐野亮子・石川裕之・小倉正義. (2015). 『認知的個性 違いが活きる学びと支援』, 新曜社.
- 松村暢隆・小倉正義. (2018). 『2E教育の理解と実践 発達障害児の才能を活かす』, 金子書房.
- 文部科学省. (2018). 「各国の才能教育の定義と取組内容」(「平成 30 年度 教育改革の総合的推進に関する調査研究～社会の持続的な発展を牽引する力の育成に関する調査研究」調査報告書), https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/chousa/_icsFiles/afieldfile/2019/04/24/1416139_1_1.pdf (2019.12.20 閲覧).
- 日能研. 「“8つの知能 (MI)” で自分の可能性を見つめ直す」, http://www.nichinoken.co.jp/np5/nnk/multiple_intelligences/mi/mi.html (2019.10.15 閲覧).
- 野添絹子. (2013). 『子どもの才能 チェック BOOK 得意ジャンルが見つかる、伸ばせる』, 小学館.
- 手島 純. (2017). 『通信制高校のすべて～いつでもどこでもだれでも学校』, 彩流社.